

令和6年度（2024年度）第2回熊本市教育の情報化検討委員会 会議録（要約）

1 日時 令和7年（2025年）2月21日（木）13時30分～15時30分

2 場所 熊本市教育センター 3階第2研修室

3 出席者 【委員】

放送大学 教授 中川 一史（委員長）

熊本大学 名誉教授 塚本 光夫（副委員長）

熊本大学 特任教授 前田 康裕（委員）

千原台高等学校 教諭 高木 洋一（委員）

藤園中学校 教諭 江藤亜矢子（委員）

黒髪小学校 教諭 小島 裕美（委員）

帯山小学校 教諭 宮本 美哉（委員）

NPO 法人アイシーティーサポートスクエア理事 早川 裕子（委員）

【熊本市（事務局）】 教育センター 吉田所長、豆塚主任指導主事 教育センター 職員

4 配付資料 次第

5 次第

（1）話題提供

①全国の先進事例、動向について

②リーディングDXの取組について

（2）自由討議

①児童生徒のタブレット端末の活用状況に関する実態調査について

②GIGAスクール構想における熊本市のこれまでの総括と今後の方向性について

閉会

6 議事の内容

開会 (事務局)	それでは予定の時間になりましたので、ただいまより令和6年度第2回熊本市教育の情報化検討委員会を開会いたします。 委員の皆様におかれましては、ご多用の中、熊本市教育の情報化検討委員会に出席いただきまして誠にありがとうございます。 本日は中川委員長がオンラインでのご参加です。また、飯村委員と坂本委員、濱石委員が欠席になります。
定足数等 (事務局)	本日は11名中、8名の委員の皆様が出席されており、要綱第五条第二項の規定に基づき、検討委員会が成立することを報告します。 開会にあたりまして、当教育センター吉田所長が委員の皆様にご挨拶を申し上げます。 【所長 開会の挨拶】
(事務局)	議事に移ります。本来であれば、中川委員長に議長をお願いするところですが、会場の様子が分かった方が良くということで、塚本副委員長に議事の進行をお願いしております。どうぞよろしくお願いいたします。
議事 塚本副委員長	中川委員長から、教育の情報化に関する全国の事例や動向について話題提供をお願いします。
中川委員長	【全国の先進事例、動向について、話題提供】
塚本副委員長	リーディングDXの取組について説明をお願いします。
(事務局)	【リーディングDXの取組について、話題提供】 五福小学校は、昨年度に引き続きリーディングDX事業の指定校として実践を発信しています。7月にはApple認定校のOpenDayも兼ねて公開授業を実施しました。 5つの実践について報告します。 1つ目の実践として、子どもが自ら学習状況を把握し、主体的に学習調整

	する「自己調整学習」に取り組んでいます。この取組は、リーディング DX 事業の指定校を受ける前から実践している内容です。 単元の初めに、教師が大まかな単元全体の学び方を説明します。それに沿って子どもが学習を進めていきました。1 時間ごとの学習の振り返りを「内容」と「方法」の二つの視点で行い、次の時間にその振り返りをもとに、子どもたち自らが次の学習課題を計画しました。また、時間配分なども子ども自身が決めて、個別やグループなどの形式で学習を進めていくようにしました。そのサイクルを繰り返しながら、子どもたちが主体的に学習を進めました。 2 つ目は、教科を横断的な視点から編成した教育課程における、情報活用能力の育成に取り組んだ内容です。 五福小学校では、毎年 1 学期に新しく赴任した先生方のために、校内研修の時間に地域を探索し、子どもや地域の実態を把握することに時間をかけ、しっかり行っています。そして、夏休みに十分時間をとってカリキュラムマネジメントを行い、子どもや地域の実態を踏まえて、よりリアルな課題が生まれるようみんなで考える時間を設定しています。それぞれの学習過程にサイクルがあり、そのサイクルを回しながら、最終的な課題解決に向けて進んでいくように構成されています。また、全学年で地域を題材にした学習を行っています。それぞれの取り組みを進める中で、情報活用能力が自然に伸びていくような手立てをとっています。 3 つ目に、端末の日常的な持ち帰りによる家庭学習の充実です。4 つの学年が例として挙げてありますが。 左上の 3 年生や右下の 6 年生は、身の回りにあるものに関心を持たせ、家庭学習で材料を集めて、学校で共有するという実践です。右上の 5 年生は、音楽の授業で、家庭で行った個別の演奏の練習を録画して提出するという実践をしました。担任が個別の練習風景を把握することができて、評価にもつながっています。それから端末の特性を生かして学習しているのが、4 年生の月の時間による変化を観察しようというところです。4 年生の理科では月や星について学習をしますが、端末を日常的に持ち帰っていることで、夜空の撮影もできることで、より身近なものとして捉えることができました。 4 つ目は、は思考ツールの活用です。学習支援アプリに入っている思考ツールを低学年から利用しています。子どもの発達段階に応じて、その学年に応じた思考ツールを選び、ツールの特性にも触れながら学習で使用しました。そして、単元の最後にはパフォーマンス課題を設定して、様々な表現方法でアウトプットができるように、学年に応じた情報活用能力の育
--	--

成に取り組みました。

5つ目は、ループリックの活用です。子どもが学習の途中で自己評価しながら学習を進めるために、学年に応じてループリックを活用しました。

この事例では、教師の方が評価の C に当たるところを全体に提示して、学級全体で A や B の評価をどうするかを話し合いながら決めている様子です。ループリック評価を活用することで、子どもたち自身は、客観的に自分の学習を振り返り、主体的に進めることができました。

最後に、五福小学校では2学期に、4年生、6年生の児童の端末で、タブレット端末の標準アプリを共同編集できるように設定を変更しました。この設定によって、共同編集がやりやすくなったとの感想がありました。4年生ではここで学んだことを新聞にしたり、それから6年生では1年生に向けてお話作りをプレゼンソフトで作ったりしている様子です。タブレット端末の標準アプリを使って共同編集することで、動作もとてもスムーズだったそうです。この設定は、来春から全市で行う予定です。

このような実践事例を広めていきたいと思います。

続いて桜山中学校の実践について紹介します。桜山中学校は生成 AI パイロット校としての実践も行っています。

桜山中学校は10月24日の木曜日に研究発表会を実施しました。参加者は71名で、県外からの参加もありました。研究主題は、「自他の幸せを求め、自ら考え、主体的に学ぶ生徒の育成～STEAM教育による探究的な活動を通して～」です。主な研究内容は、「教科等を横断する単元の工夫」として、カリキュラムマネジメントの取組、「創造的なICT活用」として、生徒がアプリを選択しながら自由に使用する使い方の2つの取組が行われました。全体会ではCanvaジャパンの坂本良晶様、ルーテル学院大学の本田裕紀教授、熊本大学の前田康裕特任教授の3名による鼎談が行われました。

公開授業は、1年生も2年生も、共に総合的な学習の時間でした。1年生は「黒髪校区の魅力を世界へ発信」ということで、32時間の単元の実践でした。「黒髪校区に住んでいるけれど、地域のことを詳しく知っていない。」という問題に、どうアプローチするかという内容でした。ゴールを、「黒髪校区の歴史や自然を詳しく知り、そのことを地域の方へ魅力的に情報発信する。」と設定し、単元が構成されています。単元の流れは、「黒髪校区にはどんな場所があるのだろうか?」、「情報を魅力的にまとめるにはどうすればよいのか?」、「魅力を伝えるにはどのようにすればよいのか?」で進みました。教科は、国語、社会、数学、英語、理科が横断的に

連携しました。

2年生は、「ロボットによる災害復旧」ということで、18時間の単元で実践しました。「被災地で瓦礫撤去を待つ人がいる。」という問題に対して。ゴールを「学びを生かして被災地で瓦礫を撤去するロボットのモデルを作る。」と設定し、単元が構成されています。単元の流れは、「瓦礫撤去するロボットに必要なロボットの特征とはなんだろう?」、「ロボットの構造はどのようにすればよいだろう?」、「ロボットをより実用的にするためにはどのような工夫が必要だろう?」という流れで進みました。実際にロボットの模型を作り、実用的な動きを工夫して課題を解決していきました。関連する教科は技術・家庭科、理科、数学でした。

校内研修の実践について紹介します。

カリキュラムマネジメントは、自校で作成した単元配列表を使って行いました。探求にふさわしい単元を構想し、生徒も教師も楽しんで取り組める活動に挑戦しました。

ICT 活用の研修では、夏休みに近隣の小学校と合同研修を行いました。中学校教員が講師となり、アプリの演習を実施しました。基本的な操作方法と、授業での ICT 活用場面を考える研修をしました。そこで終わりではなく、二学期の授業にどう活用したかまで情報交換し、小中連携の授業改善に取り組みました。

校務 DX、GIGA 環境を活用した教員の働き方改革につなげる取組を 4 点紹介します。

- ・学校連絡アプリの導入で、今年導入されているメール配信システム活用。
- ・自動採点システムを活用した採点業務の時間短縮。
- ・グループウェアメッセージによる文書等の決裁・提出として、既存のグループウェアメッセージの仕組みを活用。
- ・生成 AI の校務での活用で時間短縮。

授業の具体的な実践をご紹介します。技術の授業でクラウドを活用した実践が行われました。「公園のベンチを設置しよう」という課題について、ベンチのアイデアを 3D CAD で画像を作成します。作成したものをクラウドにアップして生徒が自由に参照できるようにします。その画像を見ながらお互いにアドバイスをし、最終的なベンチの特徴を決定しました。

	生成 AI パイロット校の実践について紹介します。単元の初めに、Canva ジャパンの坂本良晶さんを講師に招き、2 年生 3 年生と教師も参加して仕組みやリスク、留意点について学ぶ授業が行われました。授業では、画像生成 AI でイラストを作成しました。自分のイメージ通りのイラストを作成するには、どのようなプロンプトを入力すればよいかを考えました。完成した画像を見せながら、学んだことをプレゼンしました。 1 年生の美術では、「いとおかし～伝えよう！私の世界観～」という単元で、画像生成 AI を使って自分のイメージに合ったお菓子のイラストを作成し、それを紙粘土で本物そっくり作る活動を実践しました。 画像生成 AI を使って店、制服やパッケージ、広告などの画像を作成します。自分の考えるイメージを言語化してプロンプトとして入力し、イメージを明確にしました。自分のイメージとの違いがあった場合は、プロンプトを修正し再度作成しました。出来上がった画像をもとに本物そっくりのお菓子を紙粘土で作りました。 Google クラスルーム（クラウド）を活用した実践を紹介します。 技術の授業で Google クラスルームを使って授業をしました。クラウド上に、単元の計画、振り返りシートのテンプレート、振り返りシートの投稿先の URL など、必要な材料、作業手順などの動画、先輩からのメッセージなどを格納し、自分のペースで学習を進めることができるようにしました。生徒は必要なタイミングでクラウドにアクセスし、自己調整をしながら課題に挑戦しました。 校内研修の充実、それから情報活用能力の育成、カリキュラムマネジメントに力を入れ、小学校とも連携した実践が行われました。先生も生徒も挑戦、進化し続ける学校の様子が見られました。 五福小学校と、桜山中学校の実践は、後日リーディング DX のウェブサイトで開催されます。
塚本 副委員長	ありがとうございました。質問はありますか。
塚本 副委員長 (事務局)	中学校では実技系以外の他の教科での実践はありますか。 数学では、GeoGebra（立体を 3D 表示するアプリ）を使って、立体の断面の面積を求めるという授業や、英語では生成 AI を使って、ディベート用の英語のシナリオを作成し、その英文を修正して討論をするという実技

塚本副委員長	系以外での授業実践もありました。 児童生徒のタブレット端末の活用状況に関する実態調査の報告をお願いします。 【児童生徒のタブレット端末の活用状況に関する実態調査について、自由討議】 概要版について報告します。 アンケートの目的・概要は以下のとおり。タブレット端末の活用状況を把握し、今後の活用推進に使用するため、全市小中学校の児童生徒・教員へアンケートを実施した。タブレットに Google フォームのアンケートを配信し回答する方式。今回で 4 回目になる。 内容は、「学校での活用」「家庭での活用」「情報モラル意識」など、約 40 問程度とした。 対象は、児童生徒（小学校低学年、小学校中高学年、中学校生徒）、授業をしている小学校の教員、中学校の教員の区分とした。回答期間は、令和 6 年 12 月 9 日から令和 7 年 1 月 10 日までとした。結果は、年度内に各学校へ返却し、次年度への分析と対策に活用する方法と、全体の結果を熊本市教育センターホームページで公開する。 回答率は 60%を超え、中学校の生徒、教員とも回答率が上がった。 概要版では、①学校での活用について、②家庭での活用について、③健康面情報モラルについて表示した。 ① 学校での活用について（授業での活用） 教科の活用率（小学生、教員のみ） ・授業での活用で全学年において 70%以上が活用していると回答。 ・小 1 の「まあまあ使う」が 30pt 増加（3.7%→33.9%）。（ドリルパークの活用も増加） 各教科の活用率（「とても使う」「まあまあ使う」の割合） ・特活の設問に具体的活動を追記したところ、すべてにおいて増加。 中学生の各教科の活用率の割合 ・中学校の国語、社会、体育、技術での「あまり使わない」「ほとんど使わない」が減少。 ① 学校での活用について（プログラミング） 「プログラミングのアプリなどを使いましたか」の間。
---------------	--

	・「Scratch」の活用率が増加。特に小1（16.5%）、小6（23.7%→32.3%）の伸びが大きい。 ・「（アプリを）使わなかった」が減少傾向。特に小1（66.1%→51.4%）、小5（42.3%→28.3%）と、全体的に減少した。 ・小学校算数の教科書に、全学年「わくわくプログラミング(Scratch)」が掲載。 ・中学校のPC教室がなくなり、技術のプログラミングはタブレットを使用。 ① 学校での活用について（授業以外での活用） 授業以外（休み時間や放課後など）にタブレットを使っていますかの問。 ・「授業以外での活用」において、教員の「ほとんど使わない」が、小中学校ともに減少。（小：27.4%→7.4% 中：34.0%→7.2%） ・教員は職員会議や校内研修等でのタブレットの活用が増加。 ① 学校での活用について（児童生徒：学習でタブレットを活用することが有効だと感じるか） 学習の中でタブレットを活用することが有効だと感じますかの問。 ・学習の中でタブレットを活用することが有効だと感じる児童生徒は85%以上。 タブレットを活用することでできるようになったと思うことの問。 ・「②すぐに調べることができる」「⑦友達と協力しながら学習を進めることができる」が高い。 ① 学校での活用について（教員：授業のどのような場面で活用しているか） 授業の次のような場面で、児童生徒一人一人に配備されたタブレットをどの程度使用させていますかの問。 ・「①自分自身で調べる場面」と「②自分の考えをまとめ、発表・表現する場面」での活用は、小中学校ともに減少している。（①小▲4.5pt）中（▲6.4pt）②小（▲4.5pt）中（▲2.0pt） ・③④「やりとりする場面」での活用が、大幅に増加している。（③小（+16.9pt）中（+6.2pt）④小（+13.5pt）中（+8.3pt）） ② 家庭での活用について（宿題について） 宿題や課題でタブレットを活用する回数は何回くらいありますかの問。 ・宿題でタブレットを活用する割合は、全体的にみると大きな変化は見られないものの、若干頻度は上がっている。
--	---

	② 家庭での活用について（内容について） ・昨年度と比較すると、家庭でタブレットを活用する頻度はている。 ・家庭では、小学校ではドリル学習が多く（学年別に見ても低学年の方が多い）、中学校では調べ学習が多い。 ・家庭での活用は、宿題での活用の方が多い。 ③ 健康面、情報モラルについて（タブレットのルールやマナーへの意識） タブレットのルールやマナーについて、次のことを守っていますかの問の「とても守っている」「まあまあ守っている」の割合。 ・児童生徒の、タブレットの使い方についての意識は全体的に高く、小学校よりも中学校の方が高い。 ・「②健康のための時間」の捉え方に個人差はあるが、他項目より低めである。 ・児童生徒と教職員の間で、著作権についての意識の差がみられる。 アンケート概要版の報告を終わります。
塚本副委員長	ありがとうございました。調査の結果を踏まえて今後の取り組み、結果をどのように生かしたら良いか、次年度どのような取り組みが必要なのか、それぞれのお立場から伺いたいと思います。
塚本副委員長	学校での活用について①のところで「タブレットを活用することで有効だと思う。」の質問で、友達と考えを共有したり比べたりするところですが、小学校が84.6%から90.3%と大きくなっています。ところが、「学校の先生の共有する」の項目は、思いっきり減っていますね。その理由はわかりますか。次のページの④、授業の場面で児童生徒同士がやり取りする場面が、34.8%から20.1%となっています。教員はやり取りする場面が少なくなっているが、子どもたちは有効だと思っています。中学校の子どもたちは有効だと思っているということは、中学校の先生は、やり取りする場面をもっと増やした方がよいのではないかと思いますかどうか。事務局からいかがでしょうか。
（事務局）	その点には注目していて、来年度の対応に生かしていきたいと思っています。前回のKPIの結果においても低く出ていました。全国学力学習状況調査でも同じような結果が出ています。先生はもっとやり取りの場面を作ってよいと思っています。児童生徒が自分で調べる場面が減っているが、「今から調べましょう。」という、「調べ学習の時間」は少なくなり、子ど

	もたちが「自分が調べたい」と思った時に調べることができるようになってきたと思います。また、発表・表現する場面は頻度としては少ないが、確実に場面が増えてきていると思います。
小島委員	児童生徒が自分で調べる場面が30%という結果を見て、授業の中で一斉に「インターネットで調べてごらん。」という場面は少ないと思っています。校外学習の準備でも、様々な調べる方法の1つとしてインターネット使うという調べ方をしている。 子どもたち同士がやり取りする場面は、ほぼ毎日あると思います。みんながどんなことを考えているのかを、思考ツールなどを使ってやり取りしている。先生方もやりとりする場面はよく設定していると思います。
江藤委員	中学校でも授業でやり取りの場面は設定していると思います。生徒に高い数字が出ているということは十分授業でやっているからだと思います。逆に教員の受け取り方が低いように思います。 個人差や教科の差はあると思います。
(事務局)	今年は設問に工夫をして「学習支援アプリでカードを提出する」とか、「タブレットの画面を見せて意見を交流する」という具体的な説明を加えたら結果に違いが表れたようです。質問の仕方を工夫すると回答も変わってくると思います。
早川委員	インターネットで検索する場面として聞かれたら、たくさん使っているという回答はされないと思います。パソコン教室があったときは、ICT支援員に、インターネットの検索の仕方を教えてほしいという要望がありました。その方法を教えた後、調べるという活動がありました。しかし、今はそんなことはありません。まとめの学習活動のなかで、画像が必要であれば画像をコピーして貼り付けるというような使い方をしています。自然に検索しているという感じです。
高木委員	高校では、生徒同士のやり取りする場面は少ないという気はします。 プログラミングに関して、Life is Tech! (ライフイズテック) の利用率が上昇している結果が出ていますが、中学校の使い方はどのような状況ですか。
(事務局)	高校では内容が難しくなるので、中学校でのブロックコーディングとテキ

宮本委員	ストコーディングをつなげる役割を持っています。既に入力されているコーディングのテキストを変更して、ホームページを作っていくイメージの教材です。シミュレーションと案内役のキャラクターが内容を指示するので、学習の流れがわかりやすくなっています。時間的には6時間から10時間ぐらいの扱いです。 設定状況については、今年度は、43校中の42校、分校以外はすべてアカウント登録されています。計画は38校で作成されています。5校は教育委員会と相談中です。12月19日時点で25校が使用しているという状況です。 中学校のパソコン室がなくなり、タブレット端末での使用が増えているようです。 インターネット検索等のところは、質問の仕方で数字が変わりそうな気がします。私の担当している通級のお子さんは、ノートテイクでも使っています。それもタブレットを使っていることだと思います。そのような使い方もアンケートに入れてほしいと思いました。 教師が気づいてないまま、児童が使っている使い方もあります。照度の調整なども、子ども自身が使っていることが多いが、教師はあまり意識していません。子どもたちが勝手に使い始めている部分がすごく多いです。 読み書きの苦手な子どもたちがノートテイクに使い始めた時に、先生方は「その子だけ苦手だから、マジョリティに合わせるため、マイノリティの子をその場に入れてあげる」感覚で導入されることが多いです。前回の時に、基礎的環境整備の話をしたんですが、最初はやっぱり合理的配慮として、その子にタブレットの何かの機能を使わせてあげるという感覚で使い始めます。その合理的配慮は、支援するべき児童が多くなると、間に合わなくなり、みんなが使えるようなものに変えるべきだとなります。あるクラスで最初、その子がノートテイクをやり始め、いろんな場面でうまくいき成功体験ができて、その子がうまくいくとなった時に、先生が国語の授業で、「今日の国語の提出は国語のノートでもいいし、学習支援アプリでもいいよ。」とどちらでもよいとおっしゃいました。初めてだったのですが、7割のお子さんが学習支援アプリで提出してきたそうです。その7割ということが先生の予想よりすごく多かったので驚いたそうです。 私が担当している読み書きが困難なお子さんと似たような困難のあるお子さんも、「学習支援アプリでもいいよ。」と言われた時に、びっしりと書いて提出してきたそうです。それで、先生は「この子がこれまで書かなかったのは、教師側の配慮が不足していた、こちらが環境を整えてあげたら、
------	--

やる子だったんだ。」ということに気づかれ、それからいろんな場面で「手書きでもタイピングでもどちらでもよい。」という使い方にされたそうです。それが自己調整につながっていくと思います。

私の担当している子どもにも、1、2年生の頃から「タイピングでノートテイクがいいんじゃない？」と伝えていたんですが、その子は「自分だけ特別は嫌です。」と言っていました。先生も「この子だけ許可しますか？」みたいだったので、「全員に『どっちでもいいよ』って言ってほしいです。」ということをお願いしました。今、5年生になって、やっと時代が全員でもいいよっていうふうになってきました。その子に、「あの頃、君に私が『タブレットがいいんじゃない？』って勧めたけど、『しない』って言ったよね。今、同じような1年生に、どうしてあげるのがいいかな。」と聞いたら、「先生たちは、子ども全員に早めにタブレットを使えるようにしてくれたらよかった。」と話してくれました。「今、宮本先生が教えている小さい子がいるんだったら、その子が手書きだけがいいって言っても、早めにタイピングが打てるようにしてあげてほしい。」と話してくれました。この話には続きがあって、その子はタイピングで打った方が手書きの漢字のテストの点が上がりました。ただの書き写しから、タイピングで読み仮名を1度理解して、文章を打つことで文脈もわかる。そうすると、手書きではほとんど練習してないのに、手書きの漢字テストの点数が上がりました。結果、2学期末に「漢字スキル」に記入していない空白がありました。漢字の練習はタイピングでいいということを、保護者と担任とその本人と私と交えて話し合っていたので、「漢字スキル」は空白があっても学ぶための「漢字スキル」だからそれでいいはずです。しかし、最後の最後になって、担任がそれは仕上がってないって言い出したので驚きました。そして、もう一度「漢字スキル」の使い方の目的を確認しました。やっぱりいろんな場面で目的を再確認していくことが、とっても大事だと思います。

教科書についても「教科書で教える」、「教科書を教えるのではない」と、若い時にだいぶ言われました。今、指導書がとても丁寧だし、教科書も丁寧になったので、結果、担任の先生に教えてない部分がないようにという圧がすごくかかっているような気がしています。学習の未履修がないようにという感じです。でも、カリキュラムマネジメントをやる時に、「この内容はここで一緒にやる。」ということをするれば、その国語の単元は、読むだけみたいにして通過することがあるかもしれません。指導書に沿った流しをしていないと「習っていません。」と子どもや保護者が言い出すかもしれません。本来何をしようとしているのかということ、私たち教師

塚本副委員長 前田委員	がもう 1 度考えなければならないと思います。そして、何のために買った「漢字スキル」だったのかとか、何のための教科書だったのかとか、何のための指導書なのかを保護者にも丁寧に伝えていかないといけないと思います。保護者は心配で今まで自分たちが習ってきたものと同じものを求めるから、「これやってないじゃないですか。」みたいなことになっていくと思います。それを思うと、私は通知表に学びのスタイルについての表現をする場面があったり、今新しく取り組んでいることについて保護者に伝えたりする意識が必要じゃないかなと思います。 ありがとうございました。 新しい端末が入るのを目の前にして、端末はある程度使えるようになっていいると思います。小学校の状況なら一通りは使えるし、学習支援アプリも普通に使えているという状況です。今私たちがやらなければならないことは、中川委員長の発言のように、今後、子どもたちが自己調整しながら、学習を自分たちで進めていけるようにステップアップすることです。そのためには、「教育観」と「学習観」を変えないと進まないと思います。 今まで通りの、一斉授業で同じようにやっていくことが授業だと思っている限りは、端末がどんなに新しくなっても、何も変わらないのではないかと危惧しています。それをどういう意識でアップデートしていくかということがすごく問題だと思っています。宮本委員がおっしゃったように、その子どもの側から見たときに、どうやって自分の学習を調整していくかということですね。 いろんな地域の学校を見てみると、中川委員長の発言のとおり、本当に「もどき」が多いです。自由進度の学習もどきのなものです。自由にやっているけど、あまり自由じゃない。子どもは学んでいる子もいるし、学んでない子もいるってような状況です。教師側には、かなり高度な専門性が要求されると思っています。例えば、社会科の学習とか数学とか、算数の学習みたいに学習の到達度が、自分で判断できるものは、結構、自己調整もしやすいです。しかし、国語の文学教材の読み取りみたいなものには、自分が解釈したものをお互いに読み比べたり、話し合ったりしながら、解釈の違いをみんなで話し合ったりする学習が当然必要になります。教師側のどういう学習活動が適切なのかとか、一人一人の子どもたちがどういうふうに学習を成立させているのかを見たり、場合によってはきちんと丁寧に教えなくてはいけない場面もあったりします。教師側のこのスキルアップをどう図るかということは、とても重要だということを、今すごく感じ
------------------------	---

塚本副委員長 中川委員長	ているところです。 端末の活用率を上げることは必要ではあると思いますが、教師側のスキル、「授業観」「学習観」のアップデートをどうやって行うかということは、私たち全体に課せられた課題だと思います。
	ありがとうございます。 実態や調査項目から読み取れることを、具体的に話していただいて非常に参考になりました。それで、話の中から質問項目と実態が少しずつ合わなくなってきたのではないかという感じがしました。例えば、「使うか使わないか」ということを聞くということは、聞く側の意図として、裏に何があるかということ、まだまだ使っていないけども、もっと使ってほしいということがあり、何パーセント上がるのかということを取りたいわけですね。しかし、100%になればいいわけではありません。学習基盤としてのツールとして考えると、また別の質問項目にしていかななくてはいいけません。例えば、情報収集の話がありました。端末を使ってインターネットで検索してほしいと思えば、「インターネットで検索していますか？」と聞けばいいわけです。でも、自分の欲しい情報がきちんと情報収集できているかどうかとなると。別にインターネットでも、図書室の本でも、おばあちゃんに聞くでも、それができているか、できてないかっていうことが重要なわけです。情報リソースは、その時その時によって変わるわけです。何を聞きたいのかによって質問項目が色々と変わってくるので、その辺の検討がそろそろ必要だなと思っています。それから違和感でいくと、注意点は、「使わせていますか？」と聞くのか「使っていますか？」と聞くのかの違いです。「使わせていますか？」の主語は教師、「使っていますか？」の主語は子どもです。質問者側の考えが質問項目に反映するということも、考えていかないといけないかなと思って聞いていました。
塚本副委員長	以上の意見を来年度のアンケートに反映していただければと思います。 GiGA スクール構想における熊本市のこれまでの総括と今後の方向性の協議に移ります。事務局お願いします。
(事務局)	【GiGA スクール構想における熊本市のこれまでの総括と今後の方向性について、自由討議】 1 回目の情報化検討委員会内容を受け、新端末更新に向けてリーフレット

	を更新し配布します。 【リーフレット更新の目的】 ・新端末に伴い運用の仕方が変更になったことや、GiGA スクール構想第2期に移ることでさらなるICT活用について意識を高めてもらうため。 ・授業づくり支援訪問で伝えていることとの整合性を図るため。 ・タブレットの破損率が年々増加している中、新端末へのタイミングで全学級で「タブレット開き」を行ってもらい、なぜタブレットが配布されているのかを共通認識するための資料にしてもらうため。 【対象と内容】 ・対象 教師編、児童生徒編（低学年、児童生徒編（小学校3年生以上））、保護者編 ・内容構成 背景、目指す学びの姿、子どもたちにできるようになってほしいこと（情報活用能力）、使用上の注意、端末の説明 【様式】 教師編 児童生徒編はタブレットで見るためA4横1枚 保護者編はメール配信アプリで配信のため、A4 縦2枚 周知のタイミングについては、リーフレットが改訂されることを校長園長会で周知しています。 熊本市教育基本理念「この豊かな人生とより良い社会を創造するために自ら考え主体的に行動できる人を育む」 タブレットの使い方「学びを深め、生活を豊かにするために使います、自分のことも相手のことも大切にしたい使い方をする」を共通して掲載しています。 （教師編、児童生徒編、保護者編の順に説明） 率直な意見をいただきたいと思います。
前田委員	「子どもたちに身に付けたい力」の部分強調するのか、それとも目指す学びの姿」を強調するのかの違いについて検討することは、現場の先生の意見を参考にすべき。
宮本委員	アクセシビリティは、全体にかかってほしいと思う。 子どもや保護者に向けては簡潔にまとめた方がよいが、教師向けに関しては、二次元コードなどで、詳しい内容へリンクするようにしてほしい。 印刷の可能性があるなら色覚多様性など色使いに配慮してほしい。

前田委員	目を細めていた時に見えづらいのは配慮が必要。 身に付けたい力より、学ぶ姿の方が受け入れやすい。
小島委員	「こどもたちにできるようになってほしい力」項目を通して目指す学びの姿に近づいてほしい。調べることが目的ではなく、調べることによって目指す授業を創造してほしい。
前田委員	写真や動画を撮るというスキルのなことと、友達と協働して作るや、情報のスキルを高めるなどが同列で書いてあることで分かりにくい。 課題を設定するや情報を集める、まとめ表現、情報を整理分析するなどの学習のプロセスに沿った書き方がよい。次の学習指導要領でも、情報活動能力を小・中・高でどのように育てるかが重要になってくる。メディアリテラシーも含めて情報を吟味したり、自分で発信したりする力がさらに重視されると思う。ハードウェアの使い方より、情報を収集するや情報を制御するなどについて抽象度を少し上げた方がよい。 問いを立てるや、課題を自分で設定するなど、自分で学習することだと決めて、その解決のために情報を集めるという書き方の方がよい。 低学年ではわかりにくい。
宮本委員	タブレットの使い方のことであると思うが、自己調整とかの話も入れたい気がする。 教師向けのパンフレットには学びの姿を大きく語った上でタブレットの使い方があった方がよい。保護者にも目指す学びの姿を知ってもらいたい。
前田委員	保護者に学習指導要領はあんまり伝わっていないので必要だと思う。 一番大事なところは、自ら学びに向かう力を育む教育の推進だと思う。そこを強調した方がよい。自分たちで学習できる雰囲気、自分に合った学習の仕方学ぶということも保護者に知ってもらいたい。
中川委員長	教師編の子どもたちにできるようになってほしい「力」は、イコール写真を撮ることではない。ここは誤解を与えるので変更が必要だ。
中川委員長	【中川委員長より総括】 熊本市に皆さんはあまり実感されないかもしれませんが、熊本市の取組

	は、本当に素晴らしいと思います。なぜかという、端末をよく使っているからではなくて、特にこの教育関係者が、学びへの、あくなき探求という姿勢が素晴らしいと思っています。だから今のような取組ができていると思います。特にコアメンバーの前田委員や塚本副委員長のような指導者、それから教育委員会、教育センターの機動力、そして現場の先生の特徴的な実践などが三位一体で機能しているところです。 今後このキーパーソンをどう充実していくのかということが、さらにやるべきことかなと思っています。この1年間関わらせていただきましてありがとうございました。
塚本副委員長	これで本日予定されていた報告・議事の全てが終了しました。委員の皆様ご協力ありがとうございました。進行を司会へお戻しします。
(事務局)	ありがとうございました。教育センター所長からお礼申し上げます。 【所長の挨拶】
(事務局)	これで令和6年度第2回熊本市教育の情報化検討委員会を閉会いたします。